

# 車中泊避難者への支援について

---



内閣府(防災担当)

避難生活の環境変化に対応した支援の実施に関する検討会(第4回)  
令和5年10月25日(水)





- ◆ 車中泊避難をどのように考えるか。
  - － 車中泊避難を行うに当たっての条件をどのように考えるか
  - － 車中泊避難場所の事前の指定や公表のあり方について
  
- ◆ 車中泊避難者に対する支援の内容をどのように考えるか。
  - － 車中泊避難場所が備えるべき機能について
  
- ◆ 車中泊避難場所の運営・管理方法をどのように考えるか。
  - － 車中泊避難場所の運営・管理の担い手について
  - － 車中泊避難場所の開設期間の考え方について
  - － 車中泊避難場所として活用することが想定される場所・施設について
  - － 指定避難所と車中泊避難場所を兼ねる場合の支援の留意点について

# 車中泊避難に係る現状について

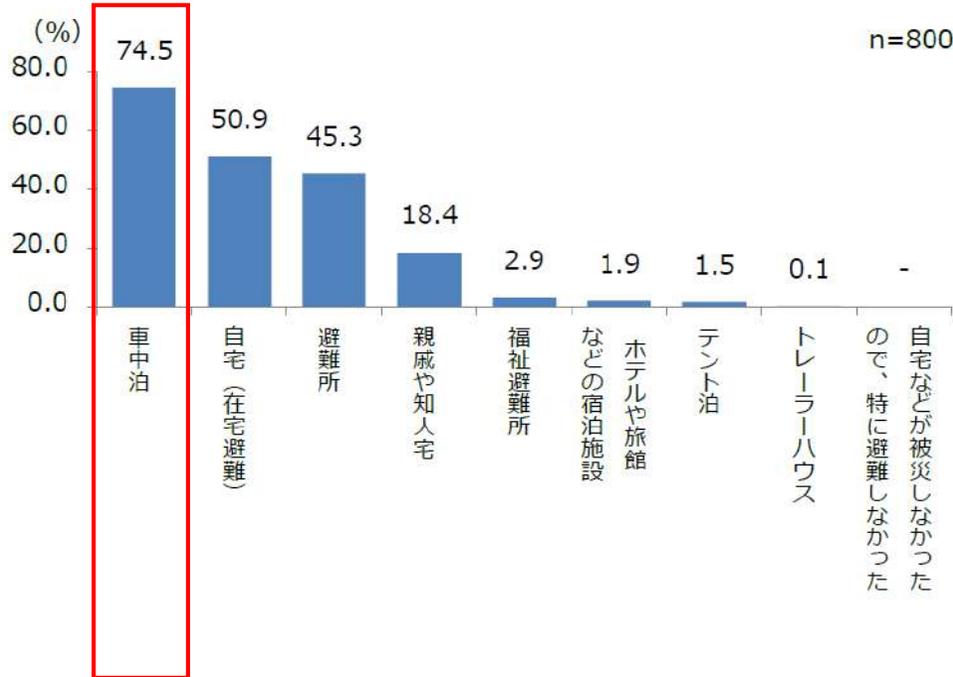
---



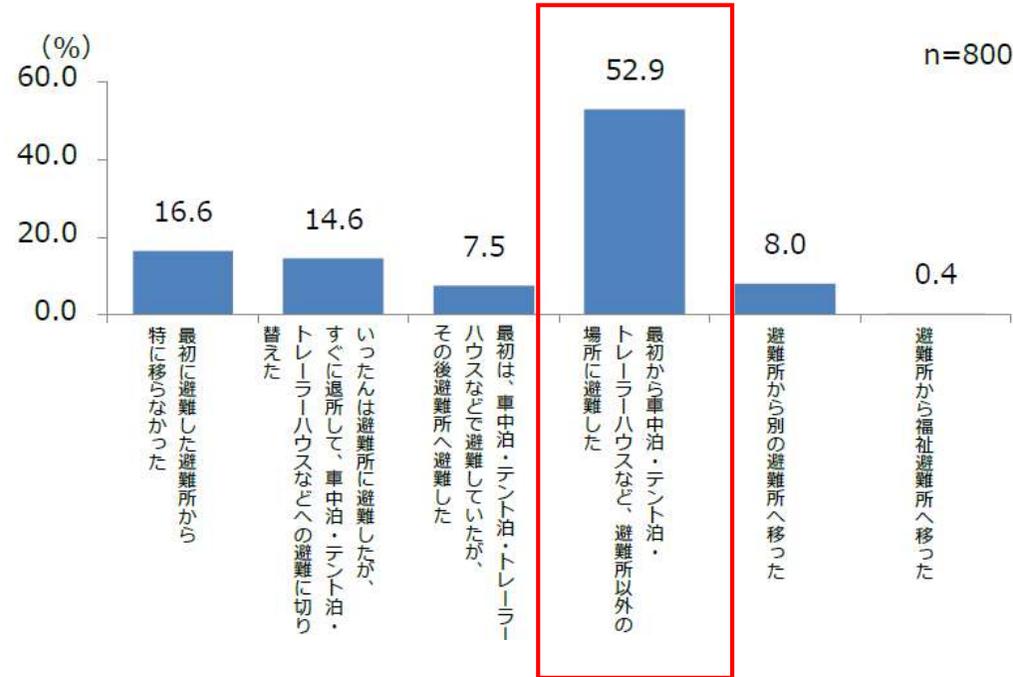
# 熊本地震での車中避難者

- 平成28年の熊本地震において避難者が避難先とした場所（複数選択可）について、回答者全体の74.5%が車中泊を経験したと回答しているほか、50.9%が自宅（在宅避難）を経験したと回答しており、避難所と回答した割合（45.3%）を上回っている。
- 避難場所の切り替えについて、全体の約半数が「最初から車中泊・テント泊・トレーラーハウスなど、避難所以外の場所に避難した」と回答している。

Q：熊本地震発生の際に、あなたが避難先として経験された場所について、当てはまるものをいくつでもお選びください。（避難者への調査）



Q：あなたは、熊本地震発生後の避難生活で避難場所の切り替えをしましたか。（いくつでも）（避難者への調査）



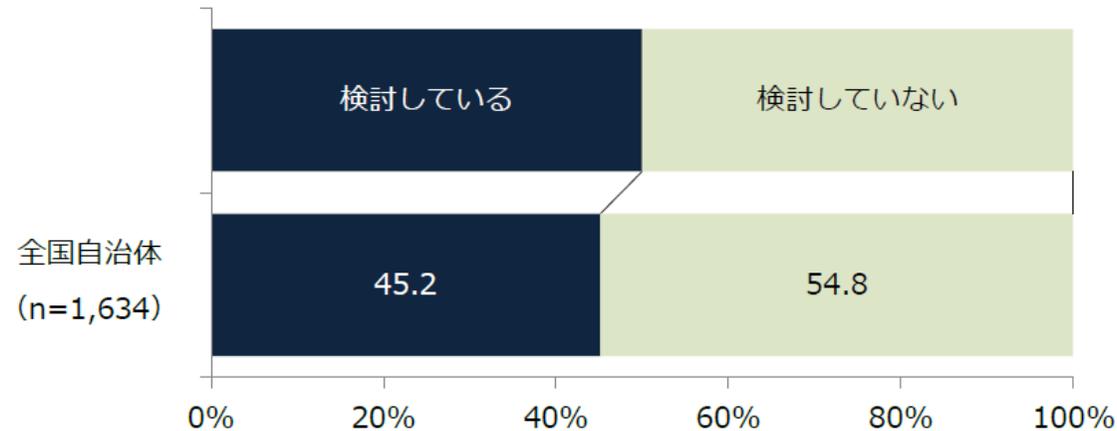


- 平成28年の熊本地震において、車中泊を行った理由として下記のような意見があった。
  - ・余震が怖くて避難所に避難したくなかった。
  - ・避難所が満員で、トイレも食事配給も長蛇の列で居られなかった。
  - ・自主避難所に避難したが、食事や水の配布がなかったため、車中泊に切り替えた。
  - ・年老いた祖母と、幼い姪っ子がいたため、避難所には行かなかった。
  - ・ペットがいるため避難所という選択肢を持てなかった。
  - ・乳児を連れて避難所にいたが、夜中に泣いてしまうため、夜は車中泊をした。
  - ・空き巣などが気になったため。
  - ・積載してある財産管理のため。



○ 災害時にテント泊や車中泊の避難者を想定した対応策を検討している自治体は、全体の45.2%に留まる。

Q：貴自治体では、災害時にテント泊や車中泊の避難者を想定した対応策を検討していますか。(ひとつだけ)(全国自治体への調査)



## 【検討していないと回答した自治体の回答理由】

- ・想定される避難者すべてを、市内の避難所で受け入れられるため
- ・避難所への避難誘導を優先して行うため
- ・エコノミークラス症候群の発症が懸念されることから、車中泊での避難は好ましいとは言えず、計画などに盛り込むと車中泊が肯定される懸念がある
- ・対応可能な施設やスペースがない
- ・テント泊や車中泊の避難者を想定していない
- ・必要性を感じない

# 車中泊避難訓練の例（高知防災プロジェクト）



- 高知防災プロジェクトでは、車中泊の受入に特化した避難訓練を実施している。
- 訓練では講演・ゾーニング・受付・巡回支援の確認等を行っている。具体的には、“ゾーニング”では車中泊専用スペースと一般車両の駐車スペースのエリア分け、“受付”では車中泊の希望者に駐車許可証を発行、誘導、予め決定した配置に沿って駐車を促す、“巡回支援”ではスタッフが定期的に巡回して健康状態を確認する、といった運営方法の確認等を行っている。

地域を守る！	▶普及啓発・人材育成	意識の向上、知識・ノウハウの普及を図る
043	避難生活における車中泊受入訓練	取組主体
		高知防災プロジェクト
		従業員数 12人   想定災害 全般   実施地域 高知県

・全国で初めて、車中泊の受入に特化した避難訓練を実施。自治体や自主防災組織とともに、安全な車中泊のための対応方法を検討している。

## 1 取組の特徴（はじめたきっかけ、狙い、効果、工夫した点、苦労した点）

### 全国初の「車中泊」の受入に特化した訓練

- ・防災啓発活動を行う市民団体の高知防災プロジェクトは、令和2年度、災害時の避難生活における「車中泊」の受入訓練を開始した。
- ・災害が起こった際、避難生活には地域の小学校等の体育館が使用されることが多い。しかし、体育館は温度・湿度管理が難しいこと等から、避難所での生活環境によって起こる疲労は、災害関連死の原因の一つとされている。また、令和2年に実施された「災害時の避難における新型コロナウイルス感染症対策等に関する国民の意識や行動調査」（環境防災総合政策研究機構）の調査結果によると、災害時の避難について、「自治体が指定する避難所に行かないようにする」と回答した人が全体の16%に上り、密になりやすい体育館への避難をためらう人も増えている。
- ・同団体は、熊本地震で多くの車中泊避難生活者が出たことや、前述の調査において災害時の避難について「マイカー等を使って車中避難をする」と回答した人が全体の約30%を占めたこと等から、今後、災害時における避難生活において、車中泊を希望する人が増加すると想定している。それに伴い、車中泊者への支援の必要性も高まると想定し、車中泊の受入に特化した訓練の実施を企画した。
- ・訓練は3時間構成となっており、講演・ゾーニング・受付・巡回支援の確認を行う。「ゾーニング」では、車中泊専用スペースと一般車両（避難所利用者）の駐車スペースのエリア分けを行い、車中泊専用スペースでは生活空間の確保と新型コロナウイルス感染症対策のため、車両ごとに1台分ずつ間隔を空けて駐車位置を決定する。「受付」では、車中泊の希望者に駐車許可証を発行し、専用スペースに誘導し、予め決定した配置に沿って駐車を促す。「巡回支援」では、スタッフが定期的に巡回して健康状態を確認したりする運営方法を確認する。



訓練会場に集まる参加者



受付、誘導を行う様子

### 懸念されるエコミークラス症候群への対応

- ・車中泊は、エコミークラス症候群の発症が懸念されているが、同団体は、こまめな水分補給や足の運動、着圧ストッキングの使用など、充分な対策を行うことで、予防が可能であると考えている。講演の中では、車内の後部座席を倒して水平の状態で横になることができる車の場合にのみ車中泊を許可するべきであることや、血流を促す着圧ストッキングを備蓄しておくことなど、受入にあたっての注意事項も解説している。

## 車中泊をより安全かつ快適にするため自動車メーカーとも協力

- ・「災害時の車中泊について学びたい」という声は増えてきており、同団体には、大手自動車メーカーの車中泊フェアの監修依頼も寄せられた。同団体はフェアにおいて、衣類等で隙間を埋めて車の座席を水平にする工夫や天井を活用した荷物収納、100円ショップ用品を活用した生活術（洗濯ロープ、防虫ネットでの網戸作成）等を紹介した。

### 車中泊を快適に I

1. 窓の自閉し、プライバシー確保、遮光対策  
遮光カーテン、バスタオルなどで代用  
※災害避難用には所外から見えるように
2. クッション性・マット、布団、敷きマット  
布団は床敷きやバスタオルで埋める
3. 正しい姿勢を確保、荷物整理  
荷物が多い場合は面倒でも  
寝違等は避けたい。  
（仮寝は注意！）



### 車中泊を快適に II

4. 天井を有効利用  
市販のネットと結束バンドで対応
5. 運転席等の足元を埋める  
2. 飲料水の購入の量が嵩高として最適。  
また荷物入れにも活用可能。



### 車中泊を快適に III

6. 避難所生活との併用も想定されるので、避難グッズも併せて準備。
7. 荷物の置き場所を決めておく（積み収納）
8. 使い慣れた寝具等、自分の快適グッズを準備



車中泊を快適に行うための工夫

## 2 取組の平時における利活用の状況や防災・減災以外の効果

- ・同団体は、いざというときのために平時から、レジャーでの利用も含め、車中泊を快適に行うための環境を整えておくことが重要であると考えている。

## 3 現状の課題・今後の展開等

- ・場所の確保等の課題はあるが、同団体は今後、さらに多くの自治体等において、受入訓練の実施を進めていきたい考えである。

## 4 周囲の声

- ・災害対策の基本は多数の選択肢を持つことなので、車中泊支援の必要性を感じた。（同訓練参加者）
- ・本町は市街地が沿岸部にあり、南海トラフ地震の臨時情報（半割れ）が出されると、住民の大半は自家用車で山間部に避難することになる。多数の車中泊が出るのが予想されるため、取り組まなければならない課題である。（同訓練参加者）
- ・エコミークラス症候群のおそれがある中で車中泊は辞めるべきである、と決めつけるのではなく、車中泊希望者が増加している現実もしっかりと対応できるよう、必要な支援を考えていけべきである、と感じた。（同訓練参加者）

### 担当者の声

- ・災害対応の基本は複数の選択肢を持つこと。車中泊をせざるを得ない状況も想定して、自治体は受け入れや支援について検討するべき時期に来ています。また住民側もエコミークラス症候群対策や、少しでも快適に車中泊を行えるよう準備しておきましょう。

問合せ先	動画
高知防災プロジェクト TEL：088-802-2201 FAX：088-802-2205 E-Mail：yamasaki.mikio@kni.biglobe.ne.jp	



- 災害時にやむをえず車中泊避難をする場合のポイントについて整理した「車中泊避難ヘルプBOOK」を国内自動車メーカーが作成し、公表するなど、民間企業においても車中泊に備えた取組が行われている。
- 車中泊避難の注意点やエコノミークラス症候群の予防、備蓄等の災害への備え等について整理されているほか、車のボディタイプ別のシートアレンジについても紹介されている。

## 原因と症状、予防と対策を知る

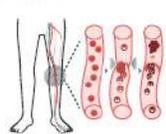
### エコノミークラス症候群を予防しよう！

#### エコノミークラス症候群とは

食事や水分を十分に取らない状態で、車などの座席に長時間座っていて足を動かさないと、血行不良が起こり血液が固まりやすくなります。その結果、血の固まり(血栓)が血管の中を流れ、肺に詰まって肺塞栓などを誘発する恐れがあります。



クルマの中や避難所などで長時間同じ姿勢が続く



足の血流が悪くなり、血管に血栓(血の固まり)ができる



足の血栓が血流に乗って、肺の血管を閉塞させる

#### 血栓がたまやすくなる条件

血液の流れが滞ること	クルマの中や避難所など狭い空間で同じ姿勢を続ける
血液が固まりやすくなること	水分摂取不足(トイレを控えることによる水分摂取不足等)による脱水傾向
血管が窄つくこと	避難時の足のケガ、打撲など

※特に、紅腫や疼痛をお持ちの方はご注意ください

#### 過去の地震と発症の特徴

新潟中越地震や熊本地震でエコノミークラス症候群を発症された多くの方が車中泊避難を経験され、40～60代の女性の発症が多かった特徴があります。トイレ事情が整わない事により、水分摂取を控える傾向があるようですのでご注意ください。



#### 予防のために心掛けると良いこと

- 1 ときどき、軽い体操やストレッチ運動を行う
- 2 十分にこまめに水分を取る
- 3 アルコールを控えるできれば禁煙する
- 4 ゆったりとした服装をし、ベルトをきつく締めない
- 5 かかとの上げ下ろし運動をしたりふくらはぎを軽くもんだりする
- 6 眠るときは足をあげるなども行いましょう

#### 予防のための足の運動

- 1 足の指でグーパーを繰り返す
- 2 足を上下につま先立ちする
- 3 つま先を引上げる
- 4 ひざを両手で抱え、足の力を抜いて足首を回す
- 5 ふくらはぎを軽くもむ

出典元:厚生労働省「エコノミークラス症候群の予防のために」



## 車中泊避難ヘルプBOOK



### 災害時の車中泊避難とは？

覚えておきたい車中泊避難のポイント  
エコノミークラス症候群予防  
車中泊避難アイテム  
シートアレンジ

HPはこちら



# 車中泊の考え方について

---



- 内閣府、厚生労働省、消防庁、観光庁は、「避難所における新型コロナウイルス感染症への対応に関するQ & A」(第3版)において、車中泊避難者への対応を示している。
- ペットの世話やプライバシー確保など様々な理由により車中泊を選択する避難者が想定されるとしているほか、感染症下の状況では、車中泊が増えることが想定されている。

## ■ 「避難所における新型コロナウイルス感染症への対応に関するQ & A」(第3版) (抜粋)

(車中泊への対応)

やむを得ず車中泊をしている人への対応は、どのような点に留意すべきでしょうか。

ペットの世話やプライバシー確保など様々な理由により車中泊を選択する避難者が想定され、感染症の現下の状況では、車中泊が増えることが想定されます。そのような時は、次のことに留意する必要があります。

- ・豪雨時は、車での屋外の移動は危険であること、また、やむを得ず車中泊をする場合は、浸水しないよう周囲の状況等を十分確認しておくことを周知します。
- ・車中泊のためのスペースを確保する場合には、できる限り施設内の駐車場など一か所にまとめて車両スペースを確保します。夜間の安全確保のため、照明のある場所が望ましいです。
- ・市町村が車中泊のためのスペースを確保する場合などにおいては、食料等必要な物資の配布や、保健師等による健康相談等を受けられる場所等の情報を車中泊の避難者に伝え、支援を受けられるよう促します。また、物資の配布等を通じて車中泊の避難者の情報を把握できるようにします。
- ・いわゆるエコノミークラス症候群の対策として、(別紙10)を避難者等に配布し、歩行や水分補給等を進めるなど、避難者への適切な支援を行うとともに、ホテル・旅館、研修所、その他宿泊施設等の避難所を活用することも考えられます。
- ・車のように狭く気密な空間では短時間で車内の温度が上昇しやすく、熱中症の危険性が高まります。車両スペースはできるだけ日陰や風通しの良い場所を確保し、車用の断熱シートや防虫ネット、網戸を使用する等の工夫をします。また、車のエンジンをかけたままカーエアコンを入れていても、暑い場所では自動車はオーバーヒートしてエンジンが停止してしまうため、特に乳幼児等の自分で行動できない者を車の中で一人にさせないようにします。
- ・夜間等寝るときにエンジン、エアコンをつけたままにすることは避けるようにします。

# 自動車避難と車中泊避難の区別



- 新潟県では、防災に役立つ各種パンフレットを作成し、防災意識啓発に活用している。
- パンフレットでは、**緊急時に車で避難する“自動車避難”**と**避難生活において車を使用する“車中泊避難”**を区別した上で、災害時にやむをえず車中泊避難をする場合に備えて、注意するポイントなどをパンフレットに整理し、公表している。
- エコノミークラス症候群については、チェックリストを作成し、**リスクの高い人への注意喚起を行っている**ほか、併せて**対処方法**や**救護所に行く必要がある場合の例**を示している。

### 車中泊避難における



**エコノミークラス  
症候群を  
予防しよう!**

✓**リスクチェックシート**

※過去の傾向を項目化しておりますので、災害の避難状況・環境によって異なる場合があります。

項目	チェック
車で足を下ろして4時間以上座っている、寝ている。	□
トイレを我慢することが多い。	□
足が少しむくんでいる。	□
水分不足である。 <small>(日中の水分、食事が6時間以上とれていない【水分なら半日で500ml】、汗をたくさんかいた、下痢や嘔吐が繰り返している、唇や手足がカサカサしている)</small>	□
現在、足にケガ(打撲を含む)・骨折・やけどを負っている。 または3か月以内に手術を受けた。	□
被災前から治療中である。 <small>(長がん剤治療、高血圧症、糖尿病、心臓病、腎臓病、医師より血栓が出来やすいと説明を受けているなど)</small>	□
感染症にかかっている。 <small>(インフルエンザ、新型コロナウイルス感染症【COVID-19】、ノロウイルスなど)</small>	□
過去にエコノミークラス症候群と診断されたことがある。	□
女性である。 <small>※日本の災害では男性よりも女性の方が1.5倍程度多く発症した結果に基づいています。</small>	□
妊娠中、または出産後2か月以内である。	□
ピルまたは女性ホルモン剤を服用している。	□

**「エコノミークラス症候群とは」**

食事や水分を十分に取らない状態で、車などの狭い座席に長時間座っていて足を動かさないと、血行不良が起こり血液が固まりやすくなります。その結果、足の腫まり(血栓)が血管の中を流れ、肺に詰まって肺塞栓などを誘発するおそれがあります。

**「症状チェック」**

被災前と比べてみましょう!

**1つでも該当する場合は救護所に行ってください。**

- 片側の足がひどくむくんで痛い、またはひどくむくんで発赤している。
- 片側の足に痛みがある(運動していないのに筋肉痛のような痛み)
- 息苦しい、呼吸が早い、駆け足をした時のような息切れ感がある。唇の色が悪い。

**! 該当数が多いほど注意が必要です。**

また、無症状で突然に命に関わる場合もありますので、**予防対策が大切です。**

**対処方法**

4,6時間ごとに歩く



足を高くして寝る



ふくらはぎのマッサージ



節湯・熱湯



水分補給



靴圧ソックスの着用



※これらは予防方法のため、完全に発症を防ぐものではありません。

このパンフレットに関するお問合せ  

**新潟県防災局防災企画課**  
 〒950-8570新潟市中央区新光町4番地1  
 TEL: 025-282-1606  
 FAX: 025-282-1607  
 Mail: ngt130010@pref.nigata.lg.jp

【監修】新潟大学医学部総合研究所特任教授 横沢 和彦  
 高知防災プロジェクト代表 山崎 水紀夫  
 【協力】公益社団法人中越防災安全推進機構地域防災センター

やむをえず



# クルマで避難生活

## するときの リスクとソナエ

車中泊避難とは、災害時に避難所ではなく車を避難先として選択すること。半日や1日単位ではなく、数日間車を生活を行うことをいいます。

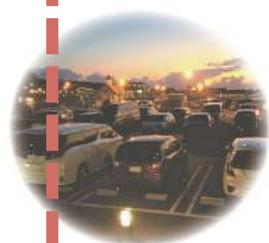
災害時は命を守る避難生活が重要です。指定避難所での感染症への感染への懸念もあり分散避難が検討される中で、プライバシー確保やペットとの同伴避難などを理由に車中泊避難を選択する方が多くなっています。

また、大雪での立往生や災害時に避難所に行った際に人がたくさんで中に入れないことなども考えられます。

一方、車中泊避難には、エコノミークラス症候群や一酸化炭素中毒等の命にかかわる危険もあります。

そのために、踏まえずに車中泊避難を行う際の注意点や備えについて一度考えてみましょう。

- ・自動車避難：緊急時に車で避難すること
- ・車中泊避難：避難生活において車を使用



**安全な車中泊避難のための**

### 3つのポイント

**ポイント①**

安全な場所を  
選ばう!



**ポイント②**

車中で体調を  
崩さない!



**ポイント③**

必要なモノを  
用意しよう!



資料提供：新潟県

# 自治体の取組の例（九都県市首脳会議）



- 九都県市首脳会議※では、車中泊による避難について、災害時における避難者の生命・健康に直結する喫緊の課題であるとともに、避難者が多く発生する首都圏における広域的な共通課題であることから、対応について検討するため「大規模地震における車中泊による避難者への対応研究会」を設置し、議論を行った。  
※埼玉県・千葉県・東京都・神奈川県知事、横浜市・川崎市・千葉市・さいたま市・相模原市の市長により構成
- とりまとめでは、車中泊は状況把握の困難、健康被害リスク等から九都県市として推奨するものでないことを明確化するとともに、車中泊避難を選択する者が発生してしまう場合には、各自治体が現行の包括的な避難者支援の一環として対応を検討することとしている。
- また、様々な事情で車中泊避難を選択せざるを得ない住民に対しては健康被害のリスク等を回避・低減できるよう、広報のあり方等を検討する必要があるとしている。

前提として、車中泊避難への対応など防災対応のあり方については、九都県市においても、地域性に応じ多様であり、以下は、そうした状況を踏まえた共通的な課題に対する取りまとめ事項である。

- (1) 避難所を運営する各自治体の構成要素（人口、面積、空地状況等）により差はあるものの、適切な生活支援を行うため、基本的には避難所避難を推進すべきである。ただ、避難所での生活を快適なものにするため、設備の更なる充実が必要である。また、設備の充実だけでなく、女性の視点や要配慮者の視点を反映した避難所運営が行われるような環境整備などソフト対策を併せて推進していく必要がある。
- (2) 車中泊避難については、3（4）ア〜ウなど深刻な問題点が存在しており、九都県市として推奨するものではないことを、明確にしておく必要がある。（内閣府注：3（4）ア 避難者の把握が困難であること、イ 災害関連死及び健康被害リスク、情報伝達等の難しさ、ウ 車中泊をする場所による災害対策への影響）
- (3) 車中泊避難には、プライバシーの確保等を求めて行われる場合も多く、車中泊避難を選択する者が発生してしまう場合には、各自治体が現行の包括的な避難者支援の一環として対応を検討する。
- (4) 車中泊避難に伴う健康被害は極めて重要な問題であり、その対応は必須である反面、啓発方法を誤り、車中泊避難を推奨しないという大前提が伝わらず、その健康被害への対応方法のみが住民に伝わってしまうと、結果として自ら車中泊避難を選ぶ者を生み、公助を困難にする可能性がある。したがって、車中泊避難によるリスク等を住民に正確に周知することで車中泊避難の選択の抑止につなげるとともに、様々な事情で車中泊避難を選択せざるを得ない住民に対しては健康被害のリスク等を回避・低減できるよう、広報のあり方等を検討する必要がある。
- (5) これまでは、災害発生の際に、被災自治体等において避難所での生活も踏まえたエコノミークラス症候群の予防対策が示されてきたが、その内容は必ずしも具体的なものではなく、また、医学的に統一的な見解も示されていない。車中泊の生活実態等を捉え、その全体を俯瞰した視点による医学的知見に基づく検討が必要と考える。



- 群馬県では、令和3年に「災害時における避難の基本的考え方－群馬県避難ビジョン－」を策定し、分散避難等の取組を進めており、避難の選択肢として在宅避難、ホテル避難、縁故避難に加え、車中避難を位置づけている。
- 車中泊を検討する際には、健康への影響を考慮して検討することとしており、妊産婦等のハイリスクの方は車中泊を避けるべきとしている。また、エコミークラス症候群対策や口腔ケアは、避難初期から実施することとされている。
- 車中避難の実施期間は発災前後1、2日程度の「命を守る避難」の選択肢として位置付けられている。

## ■ 「災害時における避難の基本的考え方－群馬県避難ビジョン－」（抜粋）

自家用車の中で避難するいわゆる車中避難を考える際には、健康への影響を考慮して検討する。特に静脈血栓塞栓症（エコミークラス症候群）や肺炎に注意し、妊産婦等のハイリスクの方は発症の危険性が高いため、車中避難は避けるべきである。また、こまめな水分補給、軽い運動、弾性ストッキングの活用といったエコミークラス症候群対策や口腔ケアは、避難初期から実施する。

自家用車等を利用して避難する際は、交通渋滞が発生する前に早めに行動することや、移動中に被災しないために、経路及び駐車場所についてハザードマップ・防災マップ等を利用して安全性を確認することが必要。

なお、少なくとも、市町村からの避難指示が出される前に避難行動をとる必要がある。

こうしたことと併せて、車中避難は発災前後1、2日程度の「命を守る避難」の選択肢として位置付ける。

県民の多くが日頃から車で移動しており、災害時においても多くの方が車で移動、避難することが想定されることから、車中避難の注意事項等を県民と共有する取組みとして避難キャンプ（仮称）を関係団体と連携しながら進める。



- 徳島県では、災害時には、一定程度の「車中泊」する者が出ることは否めず、実情を踏まえた対策（事前準備や災害時の対応等）の検討が必要であることから、「徳島県災害時相互応援連絡協議会」での議論を経て、「災害時の『車中泊』対応ガイドライン」を取りまとめ、管内の自治体に送付している。
- 車中泊は原則として推奨しないとしつつも、一定程度の車中泊避難者が発生することを想定し、事前の準備や災害時の対応について示している。
- また、車中泊の留意点や事前の準備（水、食糧、携帯トイレ等）などについて平時から住民に啓発することとされている。

## ■ 徳島県「災害時の「車中泊」対応ガイドライン」（抜粋）

### 1 前提

災害時の「車中泊」は、エコノミークラス症候群や熱中症、一酸化炭素中毒等健康面から留意すべき点が多いことから、原則として「推奨しない」こととする。

※一部の「要配慮者」で車避難せざるを得ないことが想定される場合については、「個別避難計画」の策定等を通じて、事前に関係者間で協議しておく必要がある。

### 2 現状と課題

一方、令和3年度「徳島県地震・津波県民意識調査」において、避難先への移動手段については、「①徒歩で（62.4%）」に次いで「②車で（25.3%）」となっており、また「車で」と回答した者のうち、少なくとも56.7%は「車中泊する」と回答している。さらに、コロナ禍の避難先候補（複数回答）についても、「①指定避難所（59.0%）」に次いで「②車中泊（45.8%）」となっている。

加えて、熊本地震や昨今の豪雨災害の被災地での避難状況も勘案すると、「車中泊」を推奨しないとしても、一定程度の「車中泊」する者が出ることは否めず、避難者の安全の確保を図るためには、実情を踏まえた対策（事前準備や災害時の対応等）の検討が必要である。

### 5 住民への啓発

・「車中泊」の留意点や事前の準備（水、食糧、携帯トイレ等）などについて、平時から広報誌や防災行政無線等により、住民に啓発する。



- 災害対策基本法により、事前に指定・公示される「指定避難所」のほか、発災時において設置した指定避難所の数では不足する場合には、公的宿泊施設、旅館、ホテル等の借り上げ等により避難所を確保することとされている。
- また、指定避難所の指定は、一定の生活環境が確保された避難所の量的な確保を図り、発災時に迅速に提供することができるようあらかじめ指定することとしているものであり、指定避難所として指定されていない施設を災害発生後の状況に応じ、臨時に避難所として使用することも差し支えないとされる。
- ただし、災害対策基本法第86条の6に規定される生活環境の確保に努めることは、臨時の避難所であっても求められる。

## 指定避難所

- ・災害対策基本法に基づき、平時から指定しなければならない。
- ・指定に当たっては場所の管理者の同意を得ることが必要であるほか、指定してした場合はその旨を公示する必要がある。
- ・指定避難所は指定基準を満たすことが必要。

## 指定避難所以外で開設された避難所

- ・設置した指定避難所の数では不足する場合には、公的宿泊施設、旅館、ホテル等の借り上げ等により避難所を確保すること(取組指針)とされている。

### 災対法第86条の6

災害応急対策責任者は、災害が発生したときは、法令又は防災計画の定めるところにより、遅滞なく、避難所を供与するとともに、当該避難所に係る必要な安全性及び良好な居住性の確保、当該避難所における食糧、衣料、医薬品その他の生活関連物資の配布及び保健医療サービスの提供その他避難所に滞在する被災者の生活環境の整備に必要な措置を講ずるよう努めなければならない。

# 京都府の車中避難場所の取組



- 京都府では、令和2年に実施した避難所等緊急実態調査により、風水害における避難において指定避難所では収容力が必ずしも十分といえないことが明らかになったことから、風水害時において、自宅や親戚・知人宅において災害の危険性があり、指定緊急避難場所に避難が出来ない場合に、車により緊急避難し、車内で安全を確保するための車中避難場所（車により一時的に安全確保ができる場所）を設定。

※災害対策基本法に基づく指定緊急避難場所（指定避難所）として、市町村長が指定しているものではない

- 車中避難場所は、公共施設の外、民間事業者にも協力を依頼し、府内全体で59か所が公表されている。

- ・ 公表されている情報としては、施設名や住所に加え、常時開放しているか、避難者の管理があるか、駐車場台数、駐車場料金、トイレ・障害者用トイレの有無、水道、電気、ハザードの指定等が示されている。

- ・ 車中避難場所の注意事項を示しており、その例は下記のとおり。

- ・ 水や食料の提供はありません。
- ・ ゴミは、必ず各自で持ち帰って下さい。駐車場内に、ゴミを捨てないで下さい。
- ・ 車の中で長時間座っていると、エコノミークラス症候群や一酸化炭素中毒の危険性がありますので、下記の予防策をとるようにし、避難者各自で健康管理を行って下さい。
- ・ 避難指示が解除されたら、速やかに、車中避難場所から退去してください。
- ・ 避難情報の解除が長引き、概ね一晩を超えて避難する状況に陥った際は、エコノミークラス症候群の予防のため、避難者各自で、最寄の避難所へ避難するようにお願いします。
- ・ 車中避難場所で起きた事故等については、施設管理者、市町村、京都府で一切の責任を負いません。

所在市町村	施設設置者	施設名	住所	常時開放	避難者管理	駐車場台数	駐車場料金	トイレ	障害者用トイレ	水道	電気	ハザード	備考
綾部市	綾部市	総合運動公園	綾部市上杉町大宝山10番地	×	有	500	無料	○	○ (建物内)	○	○ (建物内)	無	グラウンド解放時約1,200台
綾部市	綾部市	東部グラウンド	綾部市十倉中町段島60番地	○	無	200	無料	○	○	○	×	無	グラウンド解放時約400台
綾部市	綾部市	京都府中丹文化会館	綾部市里町久田21番地の20	○	無	250	無料	○ (建物内)	○ (建物内)	○ (建物内)	○ (建物内)	無	
綾部市	綾部市	紫水ヶ丘公園	綾部市味方町菜師谷75	○	無	159	無料	○	○	○	○	無	交流広場解放時約160台 運動広場解放時約50台 第3駐車場は使用不可。
綾部市	綾部市	西部グラウンド	綾部市物部町東野24番地の1	○	無	50	無料	○	○	○	×	無	グラウンド解放時約700台
綾部市	綾部市	以久田野多目的広場(グラウンド東側の駐車場)	綾部市館町畑山158	○	無	150	無料	×	×	×	×	無	グラウンド東側部分のみ(梅林公園横は不可)。 ※グラウンド部分は使用不可。
綾部市	京都府	京都府立農業大学校	綾部市位田町松前30	×	無	80	無料	○ (建物内)	×	○ (建物内)	×	無	平日の9時～16時半は、利用可能ですが、避難指示の発令が上記以外の時間帯及び土日祝にあった場合は、車中避難場所開設までに相應の時間を要する場合があります。 避難場所はトラクター運転練習場を使用すること。体育館にトイレあり。





- ◇ 車による避難と車を利用した避難生活（＝車中泊避難）を区別した上で、分散避難の観点やペット同伴避難、障害等の関係から避難所での共同生活が難しい避難者もいることから、避難所、在宅、車中泊といった避難生活の選択を確保する観点も重要と考えられる。  
こうしたことを踏まえ、車中泊避難をどのように考えるか。原則として車中泊は推奨しないが、一定程度、車中泊をする者が出ることを踏まえた対策の検討をすべきという方針についてどのように考えるか。
- ◇ 車中泊避難を行うに当たっては、エコノミークラス症候群への対策や妊産婦等のハイリスクの方は車中泊を避けることとするなどの条件が考えられるが、他に考えられる条件はどのようなものがあるか。  
また、健康被害等のリスクを回避・低減するための広報のあり方をどのように考えるか。
- ◇ 車中泊避難場所については、管理運営等の観点や健康管理のための状況把握や物資支援を考えると、事前に指定しておき、その場所へ避難を誘導することが望ましいと考えられるが、事前の指定・公表についてどう考えるか。

# 車中泊避難者に対する支援の内容について

---

# 車中泊をしている人への対応について



- 内閣府、厚生労働省、消防庁、観光庁は、「避難所における新型コロナウイルス感染症への対応に関するQ & A」（第3版）において、車中泊避難者への対応を示している。
- 車中泊避難者に対しては、食料等必要な物資の配布、保健師等による健康相談、車中泊の避難者の情報把握、エコミークラス症候群の対策を進めるなど、適切な支援を実施することが考えられるとされている。

## ■ 「避難所における新型コロナウイルス感染症への対応に関するQ & A」（第3版）（抜粋）

（車中泊への対応）

やむを得ず車中泊をしている人への対応は、どのような点に留意すべきでしょうか。

ペットの世話やプライバシー確保など様々な理由により車中泊を選択する避難者が想定され、感染症の現下の状況では、車中泊が増えることが想定されます。そのような時は、次のことに留意する必要があります。

- ・豪雨時は、車での屋外の移動は危険であること、また、やむを得ず車中泊をする場合は、浸水しないよう周囲の状況等を十分確認しておくことを周知します。
- ・車中泊のためのスペースを確保する場合には、できる限り施設内の駐車場など一か所にまとめて車両スペースを確保します。夜間の安全確保のため、照明のある場所が望ましいです。
- ・市町村が車中泊のためのスペースを確保する場合などにおいては、食料等必要な物資の配布や、保健師等による健康相談等を受けられる場所等の情報を車中泊の避難者に伝え、支援を受けられるよう促します。また、物資の配布等を通じて車中泊の避難者の情報を把握できるようにします。
- ・いわゆるエコミークラス症候群の対策として、（別紙10（エコミークラス症候群の予防のために））を避難者等に配布し、歩行や水分補給等を進めるなど、避難者への適切な支援を行うとともに、ホテル・旅館、研修所、その他宿泊施設等の避難所を活用することも考えられます。
- ・車のように狭く気密な空間では短時間で車内の温度が上昇しやすく、熱中症の危険性が高まります。車両スペースはできるだけ日陰や風通しの良い場所を確保し、車用の断熱シートや防虫ネット、網戸を使用する等の工夫をします。また、車のエンジンをかけたままカーエアコンを入れていても、暑い場所では自動車はオーバーヒートしてエンジンが停止してしまうため、特に乳幼児等の自分で行動できない者を車の中で一人にさせないようにします。
- ・夜間等寝るときにエンジン、エアコンをつけたままにすることは避けるようにします。



- 内閣府、消防庁、厚生労働省、環境省が示している「新型コロナウイルス感染症対策に配慮した避難所開設・運営訓練ガイドライン」（第3版）において、やむを得ず車両避難者が来所することが想定される場合の訓練内容を示している。
- 訓練において実施すべき内容として、車中泊避難者の情報把握、健康指導、定期的な巡回、物資や食料の配布が挙げられている。

## ■ 「新型コロナウイルス感染症対策に配慮した避難所開設・運営訓練ガイドライン」（第3版）（抜粋）

### 11. 車両避難者（車中泊者）への対応訓練（駐車スペースがあって、やむを得ず車両避難者が来所することが想定される場合）

#### <実施事項>

#### ① 車両避難者（車中泊者）の情報把握

物資の配布等を通じ、避難者の情報を把握する。  
受付場所を設置する場合は、密にならないように配慮する。

#### ② 駐車位置の指定

災害に応じた駐車場所に留意すること。具体的には、豪雨時は浸水しないよう周囲の状況等を十分確認する必要がある。  
車と車の間のスペースを十分にとるよう案内する。

#### ③ 健康指導

車両避難者に「エコノミークラス症候群の予防のために」を配布し、歩行や水分補給等を勧めるなど、エコノミークラス症候群に対する注意喚起とその予防について支援を行う。

#### ④ 定期的な巡回

熱中症や深部静脈血栓症（いわゆるエコノミークラス症候群）に配慮する。

#### ⑤ 物資や食料の配布

個別配布か、避難所に取りに来てもらうかルール設定する。  
着圧ストックの配布を考慮する。

※ 平時から車両避難者をやむを得ず受け入れる場合の条件（安全な駐車場所の確認、熱中症やエコノミークラス症候群対策）を検討し、事前に周知することを考慮する

- 平成28年の熊本地震の際に、熊本市においても車中泊避難者が多く発生したところ、その際の状況や実施した支援内容が、「熊本市震災記録誌」に整理されている。
- 夜間のみ駐車場に戻ってくる、転々と場所を変更する避難者がいるといった車中泊避難の特徴から、人数等の状況把握が困難であったことが示されている。
- 支援内容としては、物資の配給やエコミークラス症候群の対策に係るチラシの配布、弾性ストッキングの支給等が行われている。

## 熊本地震での車中泊避難の状況

- ・車中泊避難者の把握や対応については、地域防災計画等での対応記載はなかった。
- ・市長からは車中泊避難への静脈血栓塞栓症（エコミークラス症候群）対策について、14日の前震直後から指示が出ていたが、車中泊避難者は日中の時間帯は駐車場等にはいないが、就寝時の夜間のみ駐車場等に戻ってくるため、指定避難所以外の車中泊避難者数を正確に把握することは難しかった。
- ・さらに、車中泊を行うための駐車場も毎夜同じところとは決まっておらず、転々と場所を変更する避難者もいるため、車中泊避難者の実態を把握することは極めて困難であったことから、今回の地震において指定避難所以外の車中泊避難者数などは、ほぼ把握できていなかった。

また、指定避難所以外の車中泊避難者の把握については、把握が難しかった状況に加え、本市職員は災害復旧や指定避難所の運営等に優先的に人員を投入していたことから、実態把握が困難な指定避難所以外の車中泊避難に人員を投入することができなかった。



## 熊本地震での車中泊避難者への支援

- ・そのような中、指定避難所のグラウンド等で車中泊避難をしている被災者に対しては、他自治体の応援保健師等の支援もあり、物資の配給や静脈血栓塞栓症対策としてチラシの配布を行うなど、啓発・周知に努めた。また、静脈血栓塞栓症予防となる弾性ストッキングの支援があったことから、希望者には弾性ストッキングの支給を行った。
- ・一方、指定避難所以外の車中泊避難者には、支援の手が足りず、市HPや市長ツイッター等において静脈血栓塞栓症の注意、啓発を行うとともに、保健師等の市職員や市民病院看護師が指定避難所以外の車中泊避難者に気付いた時には、静脈血栓塞栓症予防等の積極的な声かけを行う程度の支援しかできなかった。
- ・ただし、一部地域コミュニティセンター等の指定外避難所においては、市民病院看護師がチェックリストを活用した巡回や、血栓検査を実施するなど静脈血栓塞栓症対策に努めた。また、今回の地震や余震への恐怖により、地震後トラウマで家に帰れない子ども等への心のケアとして、こころの健康センターが作成した絵本「やっぱり、おうちがいいな」を市HP等で公開し、自宅に帰れるよう啓発活動を行った。

# 自治体の取組の例（新潟県）



- 新潟県では、防災に役立つ各種パンフレットを作成し、防災意識啓発に活用している。車中泊についても、災害時にやむをえず車中泊避難をする場合に備えて、注意するポイントなどをパンフレットに整理し、公表している。
- 安全な車中泊避難を実施するためのポイントとして、①安全な場所を選ぶこと、②車中で体調を崩さないこと、③必要なものを用意することの3つを挙げている。

## ポイント① 安全な場所を選ぼう！

☑ チェックしてみましょう！



場所選びは大切！

- ☐ 建物などが倒壊しても被害を受けない場所を選びましょう  
地震の場合は、建物や電柱、看板などが倒れてくる危険があります。周辺に倒れてきそうな物がなければ、駐車する前に必ず確認しましょう。
- ☐ ハザードマップ上で災害リスクがない場所を選びましょう  
ハザードマップは浸水や土砂災害が発生するおそれがある区域を着色した地図です。駐車場や避難経路が安全かどうか、事前に確認しておきましょう。
- ☐ 近くにトイレがあるか、物資が手に入るか確認しておきましょう  
駐車する近くにトイレがあるか、水や食料などの物資の入手が可能な店舗などが近くにあるかなどを確認しましょう。
- ☐ 大雪時はマフラー周りに要注意！車の周辺や下を確認しましょう  
自動車の周辺や下に危険物や可燃物がないか、定期的に確認しましょう。特に積雪時は、車のマフラーが雪で埋もれてしまうと、排気ガスが車内に逆流して、一酸化炭素中毒に陥るおそれがあり、非常に危険です。マフラー周りのこまめな除雪が必要です。
- ☐ 大雨時の屋外避難は危険！自動車避難は控えましょう  
令和元年東日本台風では、屋外で亡くなった方のうち、54%が車での移動中に亡くなりました。避難経路が浸水する前に、早めに避難し、危険を感じたら、車での移動は控えてください。



## ポイント② 車中で体調を崩さない！

☑ チェックしてみましょう！



次なる一歩に向けて健康であることが大事！

- ☐ 水平に、足を伸ばしたまま寝ることができるか確認しましょう  
シートに座った（運転姿勢の）まま寝ることは極力避けましょう。シートに凹凸がある場合は、クッションや毛布などでできるだけ平らに。また就寝時には荷物を車外に出すなど広い空間を確保しましょう。フラットな状況が保持できるようなら車中避難生活もできますが、難しいようなら避難所等への避難を検討しましょう。
- ☐ 断熱、防寒対策を万全にしましょう  
窓ガラスや床下からの熱や冷気が入るのを防ぐために、断熱マットなどで対策をしましょう。バスタオルや古新聞（理由：保水性、吸水性が高く自張り利用できる）でも代用可。プライバシーの確保にもなります。また、車は密閉性が高いため、こまめな換気を行い、新鮮な空気を取り入れましょう。
- ☐ 携帯トイレを用意しましょう  
トイレのことが気になって、食事や水分を十分に取らないと、エコノミークラス症候群を発症しやすくなります。公共のトイレが使えないことも考え、携帯トイレを必ず用意しましょう。
- ☐ 水分補給や適度な運動を心がけましょう  
飲料水は1人1日3リットルが目安。普段から飲んで置いておくことで安心です。定期的に足の運動を行い、エコノミークラス症候群を予防しましょう。
- ☐ 少しでも異変を感じたら、ためらわずに119番に連絡をしましょう  
疲れがたまりやすい災害時は、無理は禁物。すぐに助けを呼べるよう、スマートフォンやモバイルバッテリーを忘れずに。

## ポイント③ 必要なモノを用意しよう！

安全な車中泊避難するために、普段からクルマの中に備えておこう！



- ☐ クッション、毛布  
シートの凹凸を埋めるために使用。安眠・防寒対策にも。
- ☐ 断熱マット、バスタオル  
断熱、防寒対策に必須。プライバシーの確保にも。
- ☐ 弾性ストッキング(着圧ソックス)  
エコノミークラス症候群の予防に効果あり。着圧に注意が必要※です。 ※購入時に薬局・ドラッグストアで確認してください。



- ☐ 携帯トイレ  
1人1日5回を目安に人数分の用意を。100円ショップでも購入可。
- ☐ 水、食料  
最低3日分×人数分の備蓄が必要。飲料水は1人1日3リットルが目安。食料は調理不要なレトルト食品や菓子類・栄養補助食品がオススメ。
- ☐ 燃料(ガソリン)  
災害時は給油が困難に。普段からこまめな給油を心がけて。



資料提供：新潟県



- 徳島県では、災害時には、一定程度の「車中泊」する者が出ることは否めず、実情を踏まえた対策（事前準備や災害時の対応等）の検討が必要であることから、「徳島県災害時相互応援連絡協議会」での議論を経て、「災害時の『車中泊』対応ガイドライン」を取りまとめ、管内の自治体に送付している。
- ガイドラインでは、災害時の対応として、原則として避難所への避難者同様の支援を行うこと、支援に必要な情報の把握に努めること、指定避難所を拠点として、食糧・救援物資の供与や必要な情報提供等を行うこと、仮設トイレや手洗い場の設置といった衛生対策を講じること、保健師と連携して避難者の健康管理に留意することが示されている。

## ■ 徳島県「災害時の「車中泊」対応ガイドライン」（抜粋）

### 4 災害時の対応

#### （1）「車中泊」する避難者への支援

- ・原則として、災害救助法の適用等も踏まえ、避難所への避難者同様の支援を行う。
- ・「車中泊」する避難者についても、避難者台帳等により支援に必要な情報の把握に努めるものとする。
- ・指定避難所を拠点として、食糧・救援物資の供与や必要な情報提供等を行う。

#### （2）衛生・健康管理

- ・仮設トイレや手洗い場の設置をはじめ、「車中泊」場所における衛生対策を講じる。
- ・保健師等と連携し、「車中泊」する避難者の健康管理に留意する。

特に「エコノミークラス症候群」の予防については、水分補給や適度な運動の推奨のほか、県備蓄の「弾性ストッキング」の配付も併せて対応する。

# 九州防災パートナーズの車中泊避難所設置マニュアル①



- (一社)九州防災パートナーズでは、安全な避難の方法の1つとして「車中泊避難」を確立し、避難の選択肢を広げる観点等から、「車中泊避難所設置マニュアル」を策定している。
- マニュアルでは、車中泊避難所における必要な支援や役割と人員配置について、示されており、車中泊避難での必要な支援・役割として、巡回支援、情報支援、医療的支援、受付・誘導等が挙げられている。

## 第1節 車中泊避難所における必要な支援

- 運営体制と属性：運営に女性やその他属性の方の参加するようにする
- 巡回支援  
各車両を見回り、車中泊避難者の「状況確認」「健康確認」を行う
- 情報支援：必要な情報を届ける
  - ・掲示板の設置  
情報が掲示板に残る→情報を得る機会の逸失が少ない  
情報を見に来る→身体を動かすきっかけ
  - ・チラシ  
車両の再配置など重要情報の周知に有効
  - ・回覧板  
避難者相互の関係づくりに有効  
日中人がいないときには回らない可能性あり
  - ・LINEオープンチャット  
設定が容易（個人アカウントからも設定可）  
本部-避難者間の連絡手段として有効  
名前の変更ができる  
後からログの確認ができる
  - ・FMトランスミッター  
FMラジオを介した情報伝達  
機材の用意  
入力：マイク  
中継：FMトランスミッター  
出力：FMラジオ  
発信する情報→定時連絡/ローカル情報など

□ 医療的支援 = DMA Tに準ずる

## 第3節 車中泊避難所の役割と人員配置について

- 役割/人員配置
  - ・受付時  
受付（検温・説明・書類配布）  
誘導（駐車位置/書類回収）
  - ・運用時  
巡回支援/再配置/出入確認/物資配布 など（要検討）
  - ・役割の明確化と役割分担  
※避難者が運営に参画する仕組みを作る  
例：車中泊避難所に来る人を地域との事前の協議で決定  
→地域と指定管理者でルール決め&運営  
※運営人員と避難者→運営に関わる避難者に「責任」を負わせない！！
- 検討事項
  - ・車中泊避難所内の避難者同士のネットワークの作り方  
（例：情報伝達→回覧板 / 班編制 役割分担など）
  - ・避難所の運営体制のパターン想定  
（車中泊避難関わるステークホルダーの構成を考慮した運営体制の想定）



- 必要な機能と配置のポイントとして、トイレ、給水/排水、電源、休憩所、更衣室、本部の設置について、それぞれの設置の注意点や確認すべき事項等が示されている。

## 第4節 車中泊避難所の機能と配置のポイント

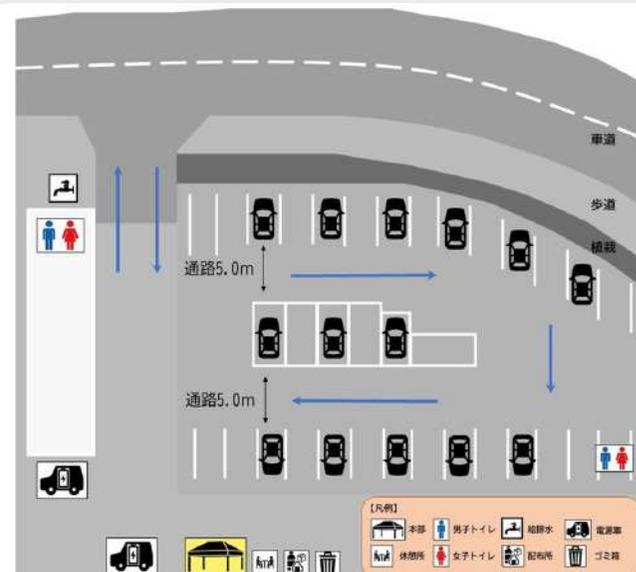
- **トイレ**：
  - ・急性期には50人つき1台。安定期では20人に1台を用意する
  - ・トイレの台数における男女比は、男1：女3（スフィア基準）
  - ・感染予防対策として
    - 利用方法の注意喚起の張紙 □ 消毒液 □ ペーパータオルを用意する
  - ・使用後の紙の処理について
    - トイレを利用した後のトイレトーパーの分別方法を考慮しておく
  - ・仮設トイレについて
    - 1台の容量は500ℓである。
    - 仮設トイレ1台がいっぱいになる人数を積算してみる
- 1人1回あたりの排泄量1.5ℓ、トイレに行く回数を1日5回と仮定
  - $500\ell \div 1.5\ell = \text{約}300\text{人分/1台}$      $300\text{人分} \div 5\text{回} = \text{約}60\text{人分/1台}$

- **給水/排水**：
  - ・施設の既存の物の場所と数量を確認する
- **電源**：
  - ・施設の既存の物の場所と数量を確認
  - ・電源車：
    - 車の性能を確認しておく（発電・給電方法と充電容量など）
    - 利用可能なワット数の使用用途を想定しておく

- **休憩所**：
  - ・日中外に出ない人のための情報交換の場として設置する

- **更衣室**：
  - ・車内では狭くて着替え等は難しいため用意する

- **本部**：
  - ・支援体制づくりと支援内容を想定しておく
    - 管理者のみでの避難所運営ではなく避難者も運営に関わる仕組みを作る
    - 想定される支援内容は
      - 巡回支援（避難者の健康状態等の把握）
      - 情報支援（避難者に必要な情報の提示提供）
      - 支援物資の配布
      - 医療・衛生（エコノミークラス症候群対策　その他はDMATに準じる）
  - ・避難所の情報の整理と把握
    - 施設名/責任者/連絡先（電話） 避難者数/要配慮者数・属性既存の設備/必要物品
  - 災害対策本部等と情報共有する





- ◇ 避難所に避難している者と同程度の支援をする必要があるということを前提に、物資支援、弾性ストッキング・着圧ソックスの配布、エコノミークラス症候群対策としての健康管理といった支援が必要と考えられるが、このほかにどのような支援が必要か。
- ◇ トイレの確保、避難者がどれだけいるかなどの車中泊避難者への支援を行うために車中泊避難を行う場所として、備えるべき機能をどのように考えるか。

# 車中泊避難場所の運営・管理方法について

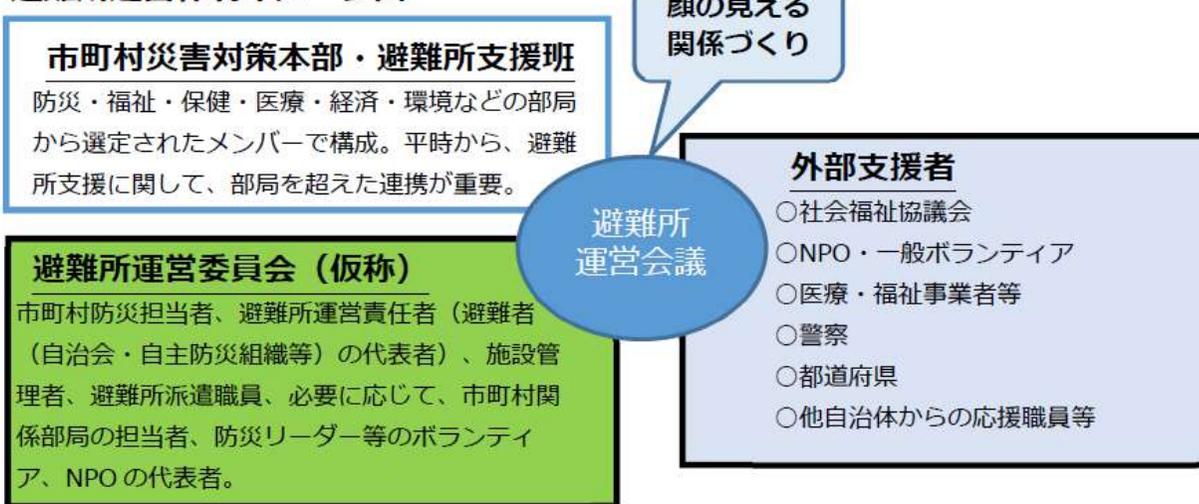
---

# 避難所の運営の考え方について



- 「取組指針」において、「避難所の運営担当者は、避難所の設置後、施設管理者や市町村職員による運営から避難者による自主的な運営に移行するため、被災前の地域社会の組織やNPO・NGO・ボランティアの協力を得るなどして、その立ち上げや地域コミュニティ維持に配慮した運営となるよう支援すること」とされている。
- また、「避難所運営ガイドライン」では、避難所生活は住民が主体となって行うべきものであるが、その運営をバックアップする体制の確立は、市町村の災害対応業務の根幹の1つとされている。

## 避難所運営体制イメージ図



- 避難所運営ガイドラインでは、避難所の被害状況把握の実施や被害を受けた避難所の応急修理等は、避難所支援班や施設管理者、避難所派遣職員の担当とされ、主に行政の役割とされている。
- 他方で、避難所の運営会議の開催や運営ルールの確立等については、主に避難者等を含む地域の方で構成される避難所運営委員会で実施することとされている。
- このように「避難所運営ガイドライン」においては、安全確認や開設については行政側の役割が示されている一方で、運営については初期の段階から地域の方の参画が想定されている。



- 徳島県の「災害時の「車中泊」対応ガイドライン」では、「車中泊」場所として、指定避難所と隣接するグラウンドや、大規模商業施設の駐車場等をあらかじめ選定し、「車中泊」場所として指定することとされている。また、検討にあたっては、施設管理者のほか、地域の自主防災組織や町内会等と連携し、必要な協議（住民への周知や運営体制等）を行うことが望ましいとしている。
- 車中泊の期間について、被災状況や避難者への支援のほか、駐車場場所管理者との調整等を総合的に勘案して対応するとしつつ、避難者の健康管理（エコノミークラス症候群等）等を考慮し、長期避難を想定するものではなく、指定避難所への移動を誘導するとしている。

## ■ 徳島県「災害時の「車中泊」対応ガイドライン」（抜粋）

### 3 事前の対応

#### （1）「車中泊」場所の検討・指定

- ・必要に応じて、指定避難所と隣接するグラウンドや、大規模商業施設の駐車場等をあらかじめ選定し、「車中泊」場所として指定する。
- ・指定にあたっては、地域のハザードマップ等を考慮し、災害リスクを考慮した場所を選定する。
- ・指定場所の収容台数等をあらかじめ試算するとともに、効率的なレイアウト等も検討する。
- ・検討にあたっては、施設管理者のほか、地域の自主防災組織や町内会等と連携し、必要な協議（住民への周知や運営体制等）を行うことが望ましい。

※市町村の取組例

- ・北島町北公園グラウンドで、100台程度収容可
- ・石井町前山公園で、50台程度収容可

### 4 災害時の対応

#### （3）避難期間

- ・被災状況や避難者への支援のほか、駐車場場所管理者との調整等を総合的に勘案して対応するが、避難者の健康管理（エコノミークラス症候群等）等を考慮し、長期避難を想定するものではなく、指定避難所への移動を誘導する。

# 九州防災パートナーズの車中泊避難所設置マニュアル③



- 車中泊避難場所の運営・管理においては、車中泊避難者と避難所避難者の駐車スペースの区分、車の運行する幅の確保や通行方向、駐車区分け（車＋生活空間が必要）、必要な機能の配置、バッファゾーンの確保といった車中泊避難特有の事項があり、こういったことについても事前から想定・準備を進めておく必要があるとしている。

## □ スペース区分

- ・車中泊避難者と予定避難所への避難者の駐車場の区分
  - 受入れ数の設定をおこなう
- ・車中泊避難者のスペース内における区分についての想定をおこなう  
(例：支援が必要な人、最低限の関与を求める人、男女、ペット連れ)
  - 再配置で対応する

## □ 車路の確保

- ・車路幅5～6mを確保し通行方向（一方通行）を決める
- ・出入口の確認、確保する

## □ 駐車区分け

- ・車中泊避難に必要なスペースは「車＋生活空間」を確保すること  
既存駐車場：1台につき1.5～2台分（参考：車椅子用駐車スペース）  
グラウンド等：幅:3.5m×奥行:5.0～6.0m

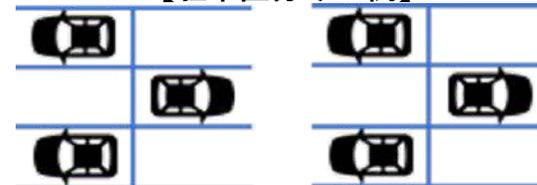
## □ 車中泊避難所に必要な機能の配置

- ・車中泊避難所に必要な機能として以下のものが考えられる。  
トイレ、給水、排水、ゴミ捨て場、物資配給所、本部、休憩所など受入れ数、スペース区分や出入り口からの距離などを考慮して設置する数、場所を考え配置する

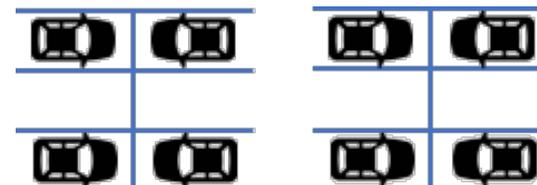
## □ バッファゾーン

- ・バッファゾーンとは、車中泊避難をする車両の受入れ受付をする際に、車中泊避難所への接続道路の渋滞を防ぐため、場内等に車を一時的に駐めておける場所のこと。  
駐車場奥や立体駐車場などであれば最上階などを活用し確保する。

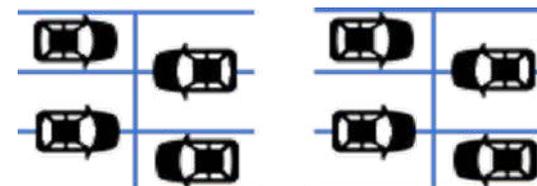
## 【駐車区分けの例】



- ・生活空間が後方になる＝狭く感じる
- ・前から入るか後ろから入るかで使い勝手が異なる
- ・デッドスペースが多いかも
- ◎ 1台ずつ取れる



- ・ドアの開閉方向（スライドドアの勝手方向）
- ・共有スペースの争いになる
- ◎ 誘導しやすい
- ・緊急避難時OK 生活避難時？



- ・ドアの開閉方向（スライドドアの勝手方向）
- ◎ 占有スペースが取れる（運転席側etc）
- ・誘導が必要
- ◎ 合理的
- ◎ 再配置の際、有力な駐め方

- 車中泊避難所の運営における役割の明確化と役割分担について、避難者が運営に参画する仕組みをつくることとしているほか、車中泊避難所内の避難者同士のネットワークの作り方や避難所の運営体制のパターンの想定を検討することとされている。

## 第3節 車中泊避難所の役割と人員配置について

### □ 役割/人員配置

- ・受付時  
受付（検温・説明・書類配布）  
誘導（駐車位置/書類回収）
- ・運用時  
巡回支援/再配置/出入確認/物資配布 など（要検討）

### ・役割の明確化と役割分担

※避難者が運営に参画する仕組みを作る

例：車中泊避難所に来る人を地域との事前の協議で決定

→地域と指定管理者でルール決め&運営

※運営人員と避難者→運営に関わる避難者に「責任」を負わせない！！

### □ 検討事項

・車中泊避難所内の避難者同士のネットワークの作り方

（例：情報伝達→回覧板 / 班編制 役割分担など）

・避難所の運営体制のパターン想定

（車中泊避難関わるステークホルダーの構成を考慮した運営体制の想定）



# 平成28年熊本地震における熊本市の車中泊避難場所の例



- 平成28年の熊本地震の際に、熊本市においても車中泊避難者が多く発生したところ、その際の状況や実施した支援内容が、「熊本市震災記録誌」に整理されている。
- 熊本地震の発災時、実際に車中泊避難が行われた場所として、大型の都市公園や大型商業施設の駐車場が挙げられている。

## 都市公園

- ・防災倉庫や耐震性貯水槽のある大型の都市公園（近隣公園）では、発災直後から多くの避難者が押し寄せ、その後、錦ヶ丘公園や秋津中央公園などでは継続的に避難所活動が展開された。
- ・主に町内自治会やボランティアなどが自主的に避難所の運営を行った。
- ・避難者は、指定避難所までの距離が遠いため、移動が難しい高齢者や、自宅の状態が気がかりな地域住民などが主に夜間、避難に来ていた。
- ・また多くの都市公園で、町内自治会長や公園愛護協会関係者が公園の施設を開放したために夜間に車中泊者が多く滞在した。
- ・公園内に老人憩の家や地域公民館などの集会所がある都市公園では、避難者の夜間宿泊や地域住民で食材を調達しての炊き出しなども多くの箇所で行われた。原則、食料などは自分たちで持ち寄っていたため、市へ物資の支援を要請した箇所もあったが、支援物資が十分だったとはいえ、近隣の指定避難所や災害支援団体からの支援を受けた所もあった。
- ・運営関係者自身も被災者であることから、ライフラインの復旧等とともに炊き出し等の活動を短期間で終結させ、滞在する避難者を指定避難所へ計画的に誘導し、避難所活動を終結させた箇所もあった（中川鶴公園等）。

- ・炊き出し等は行わないが、町内自治会等が避難者を確認し、近くの指定避難所から物資を支援する活動もあった。
- ・全体として日常的にコミュニティ活動の場所として利用されている都市公園は、自主的な避難所活動が展開される傾向にあったといえる。

## 大型商業施設駐車場

- ・自動車を使用しての自主的な避難によるものが多く車中泊者が中心である。広大な駐車スペースがあるための避難と考えられる。
- ・最も多くの避難者数が確認された長嶺西にある大型商業施設では、最大時1,200人も車中泊者があったが、商業施設自体も被災して営業をとりやめた。そのため、トイレが使えず、避難者の多くは熊本赤十字病院まで10分かけて歩きトイレを使用した。18日に、仮設トイレ5基が設置され、19日から、市より支援物資が供給されはじめた。以降、5月5日までは避難所活動（物資支援）が継続された。



- ◇ 車中泊避難者の支援において、行政が実施すべきところをどのように考えるか。
- ◇ 特に、指定避難所の駐車スペースを利用することが多くなるであろうことも踏まえ、車中泊避難場所の設置期間についてどのように考えるか。

※これまでの自治体の取組においては、車中泊を長期間実施すべきではなく、順次避難所への誘導を行うべきとする例もある。一方、車中泊避難については、避難所に入れなかった方がやむを得ず、車中泊を行っている場合のほか、個々の事情により、避難所での避難生活よりも車中泊避難のほうが望ましいとして車中泊避難を実施している場合もあると考えられる。
- ◇ 大規模災害の事例においては、都市公園や大型商業施設の駐車場といった場所で車中泊避難を行っている事例もあるが、活用される場所や施設をどのように考えるか。
- ◇ 指定避難所の駐車場等を車中泊避難者向けの場所と位置づける場合、指定避難所の指定・公表の枠組みを利用しながら、車中泊避難が可能な指定避難所という打ち出しをすることも考えられるがどうか。

また、この場合に指定避難所での支援との関係で留意すべきことがあるか。

※避難所における避難者は、防犯の観点から夜間に施錠をすることが望ましいと考えることが想定されるが、車中泊避難者も夜間にトイレを利用することが想定され、両者の調整が必要となる。トイレについては指定避難所であっても、屋外にマンホールトイレを設置する、仮設トイレを設置するといったような対応が考えられる。